

参加者の視点に注目する音楽療法プロセス研究に向けて ～はじめの一步～：概要

(第25回日本音楽療法学会学術大会自主シンポジウム2025年9月)



その1 企画趣旨
生野里花

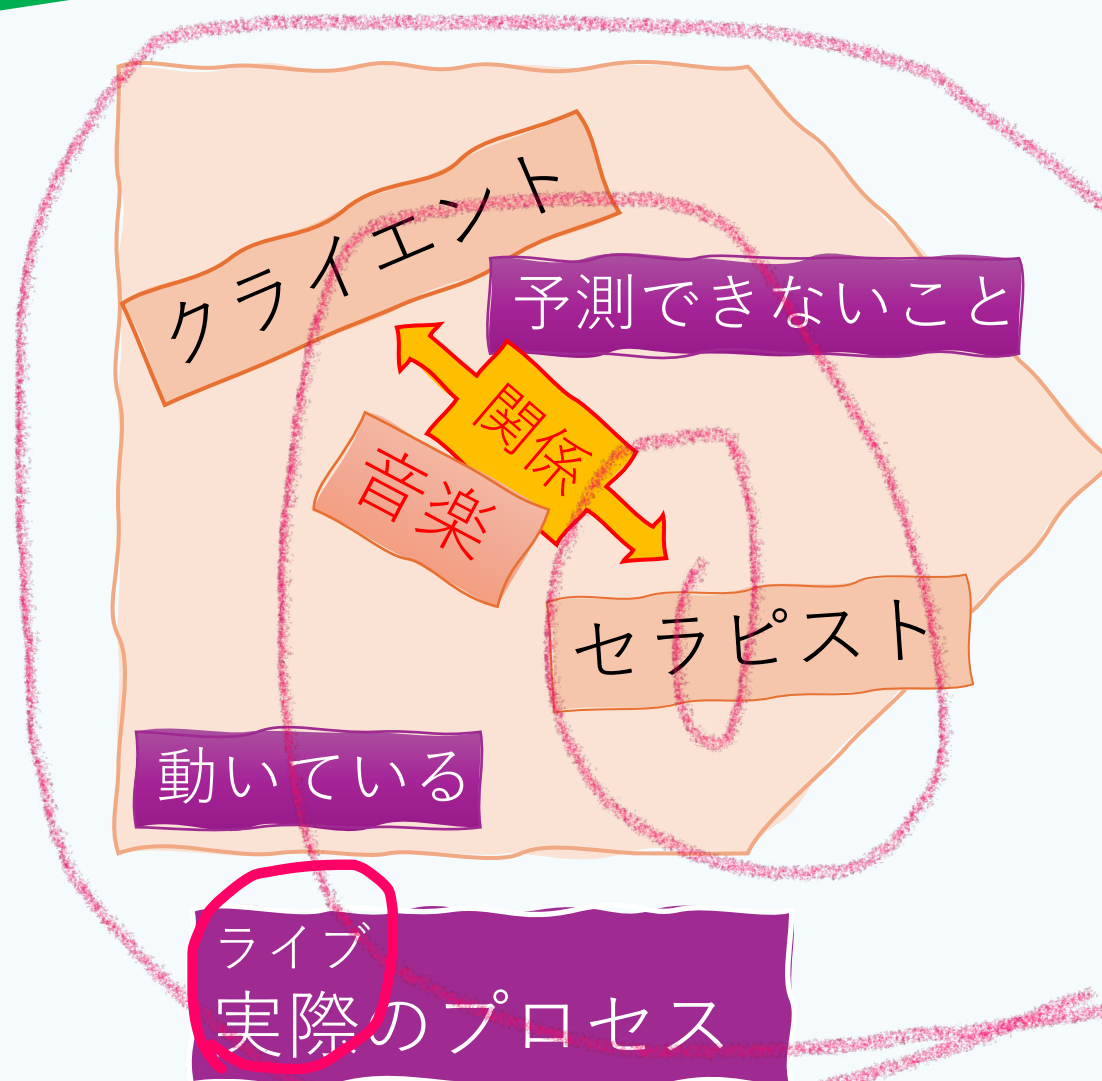
セッションの中で起きていることを、
セッションの中から知る、理解する

セッション計画と結果の間には
「予測できない・動いている」プロセスが起きているが
、「本筋から離れること」として、研究から省かれがち

アセスメント

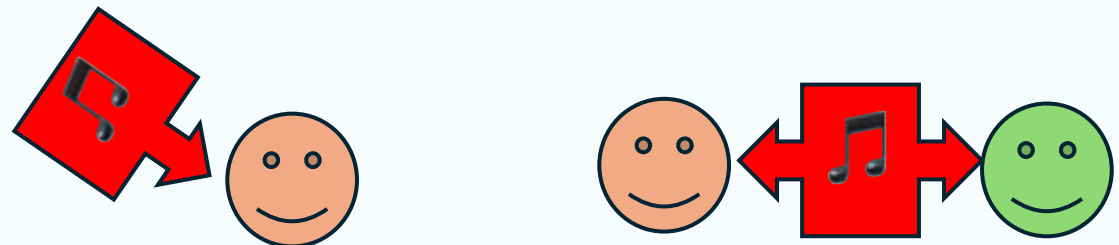
目標・方向性
の設定

プラン



「ライブのプロセス」で注目すべきことに関する近年の言説
Edwards, J. (2016) Music therapy research -Context, methodology, and current and future developments. In. Edwards, J. (Ed). Oxford Handbook of Music Therapy. Oxford University Press.

◎コミュニケーション的音楽性



音楽療法の治療的好機を、「音楽が人に影響を与える」から「人と人の関係の音楽」に見る

◎客観的心理学指標やセラピスト側の観察に加え、
エヴィデンスとしてのサービス利用者の声の利用

療法の方針

専門知

◎「音楽体験の複雑さ」が失われない研究方法

音楽を体験しているプロセスを
研究のブラックボックスから出すこと
DeNora

予測不能

「**音楽のどの要素**が効果を発揮していると言えるのか、
有効成分やメカニズムに関するもっと基礎的な研究が必要なの
ではないか。」

間接的

複雑

音楽療法理論の実践への転換

「音楽療法実践に、相対的な自律性を与える必要がある」

Stige

理 論

実践で起きていることを優先して
それを理論化する方向づけ

理論や学問的知識を
応用して行うのが実践

臨 床 実 践

理論や教科書で
「あることになっている」
「ないことになっている」縛りを一旦緩め、

日々の実践で私たち臨床者が得ている実感を
ていねいに検討する場を作ろう

このプロジェクト（りんこま）の基盤

「人と人が音楽を介して関わること」に立ち返り、
音楽療法の「プロセス」を内側から考えること

外から観察できることだけでなく、
内側で起きているさまざまなことを含め、

セッションで実感していることを「研究として捉える」をやってみる
（不完全な方法でも）。

その際、「ライブ」の中にいる「参加者」の立場を「メリット」とみなし、
その経験をデータとしてていねいに扱う。

この自主シンポジウムで提供される話題

「だれから見た」音楽療法セッションや研究？

「参加者とともに音楽療法プロセスを振り返る」 伊藤孝子

「音楽のちからを用いて」とひとことで言っているけれど、それはなに？

「語られない『音楽のちから』に目を向ける」 田原ゆみ

「音楽療法プロセス」って、まっすぐ均等に進む時間やセッションルームの中のこと？

「音楽療法プロセスにおける時間と空間の経験」 三宅博子

自主シンポジウム要旨より（一部改編）

音楽療法の研究は「変化が起こるメカニズムを理論化 (Edwards)」しようとする。しかし、実践と研究の距離がなかなか縮まらないことはこの領域の長年の課題でもある (Baker; Young)。これについてDeNoraらは、実践が「どのように」展開しているのかのプロセスに生態学的妥当性を担保して光を当てる必要性を述べ、Stigeは、概念化される前の実践プロセスから研究を出発する「practice turn（実践への転換）」を提言している。

この自主シンポジウムでは実践の『参加者』である音楽療法士 (Th.) と対象者 (Cl.) それぞれの視点を重視し、関係の渦中で起きていることに注目する出発点として3つの研究の視点を提案する。

（参考文献）

Baker, F; Young, L.(2016). The relationship between research and practice.

DeNora, T.; Ansdell, G. (2014). What can't music do?.

Edwards, J. (2018). Music therapy research; context, methodology, and current and future developments.

Stige, B. (2015). The practice turn in music therapy theory.